
塔の外へ

三毛猫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

塔の外へ

【Nコード】

N2534B

【作者名】

三毛猫

【あらすじ】

獣の耳を持つ王子様のキラー。畏怖の目で見られ、監視され、愛されずに育った彼。彼が出会ったのは・・・？

(前書き)

前作「塔の中で」を先に読むとより楽しめるかもしれません(〓^・ω・^〓)

昔むかし、獣の耳を持つ王子様がおりました。

その名をキラーといいました。

キラーは生まれてくる前に獣の耳が生えてしまう呪いをかけられていました。

それはその国の悪い魔女の仕業でした。

魔女は王家を怨み、生まれてくる男の子が王家を継げないように考えたのです。

けれど王様もお妃様も男の子が生まれてくるのを心待ちにしていきました。

お妃様は元々身体が丈夫な方ではありませんでした。

だから王家を継げる男の子が欲しかったのです。

キラーを産んで、やはり獣の耳が生えていることに悲しみはしたものの、大事に大事に育てました。

でもお妃様はキラーが物心付く頃には亡くなり、キラーは侍女たちに着てられました。

けれどある夜聞いてしまったのです。

侍女たちがキラーのことを「薄気味悪い獣の耳を持つ王子様」と呼んでいることを。

よくよく考えてみればキラーの周りにはいつも決まった者が付いていました。

それは監視役の者たちだったのです。

獣の耳を持つ王子がいつ野性の獣と化してもいいように、王様も従者たちも怯え、恐れていたのです。

ただ一人お妃様は愛する息子をひたすらに愛していました。

けれどそのお妃様もういません。

キラーは悲しみ、他人を信じることをやめました。

自分の身は自分で守ることを覚え、呪いのおかげで身についてい

た運動能力を上げました。

誰よりも早く走り、誰よりも高く跳び、誰よりも遠くを見、誰よりも優れた戦闘技術を身につけました。

そしてキラーは一騎士団の大將にまで位を上げました。

若干18歳のときでした。

キラーは一軍を率いて近隣国を次々と占領していきました。

戦闘では負け知らずのキラーの軍は自国に帰る途中、ある国に立ち寄りました。

友好条約を結ぶその国で一晩軍を休めるためです。

王子であるキラーはその国の王様とお妃様に面会しました。

そして難病のお姫様の話を聞きました。

名をダストといい、城の隅にある塔の中で暮らしているのだと知りました。

ダストが自分と同じように見張られながら暮らしているのだと思いました。

キラーはその囚われの姫君に興味を持ちました。

そして自慢の足で高く跳ぶと、ダストのいる塔をこっそりと覗きました。

一人で食事をし、一人で時間をつぶすダストに自分の姿を重ねました。

塔の中と監視された自由は何ら変わらないのです。

キラーは一晩その国で過すと、自国に帰っていきました。

時は流れ、あの国の姫君の成人の儀式に招かれました。

初めて公の場に姫君が現れるということで、たくさんの王子たち

が集まりました。

しかし姫は黒いヴェールで顔を隠し、王座から離れることはありませんでした。

最後のダンスの時、キラーは姫にダンスを申し込みました。

けれど首を横に振って断られてしまいました。

でも姫が小さな声で「ありがとう」と言うのを獣の耳は聞きました。

キラーはいつそうダストと親しくなりたっていました。

それからしばらくしてキラーは夜にこっそり城から抜け出してダストの元へ行きました。

塔の前で高く跳び、窓を叩きました。

そこで見たのは醜い顔のダストの姿でした。

キラーが開いている窓から入ると、ダストは急いで明かりを消し、シヨールを被って顔を隠しました。

「失礼、姫君」

そう言って跪き、ダストの手に口付けました。

ダストは驚き、そしてすぐに窓から現れたキラーを恐怖に満ちた目で見つめました。

「私もあなたと同じように自由を奪われ、畏怖の目で見られる存在です」

キラーは決して取ることを許されていない帽子を取りました。

帽子の中に収められていた獣の耳がダストの目に映りました。

恐れおののいたダストは尻餅について恐怖に震えていました。

その拍子にシヨールが落ち、キラーはダストの顔をはっきりと見ました。

醜いその顔をさらに恐怖で歪め、キラーを見つめました。

けれどキラーは、人は外見ではないと知っていました。

外見のままであると言うのならキラー自身が獣の心を持っているということになってしまいうからです。

「あなたも・・・私と同じように・・・？」

恐怖で震えたままダストは口を開きました。

そしてはっとしたように両手で顔を隠しました。

キラーは慌てた様子のダストにふと病のことを思い出しました。

けれど今は夜です。

陽の光は当たりません。

「なぜ顔をお隠しになるのですか？」

ダストは涙を流しながら告げたのです。

「私は醜いのです。親が見捨ててるほどに。だから見ないでください・・・」

病ではなく、そんな理由でこんな塔の中に暮らしていると思うと、キラーはこの姫がとても可愛そうに思えました。

「そうおっしゃるのなら私は見ようとはいたしません。ただあなたともっとお話がしたい」

キラーはショールを手にとると、ダストに被せてやりました。

そして椅子に座らせ、さまざま外界の話を話し始めました。

他国との戦の話や、獣の呪い能力、良い国の作り方、自分の夢――

――

時間が経つのも忘れて話をしました。

ダストはどんな話にも楽しそうに笑い、驚き、感心しました。

ダストにもっといろいろな話を聞かせてやりたいと、たびたび塔に忍び込みました。

時間の許す限り会いに行き、次第にキラーは塔の中に囚われているダストを自由にしてやりたいと思うようになりました。

逢瀬を繰り返すうち、キラーはダストに恋心を芽生えさせていたのです。

出会ってから数個の季節を越えたときキラーは告げたのです。

「私はあなたを知るたびあなたに惹かれていきます。国を捨てて一緒に暮らませんか？」

こんな塔の中よりもっと広い世界へダストを連れ出したい、一緒に生きて行きたいと思ったのです。

キラーにはどこか異国に行くとしても、森で暮らすにしても生きていく自信がありました。

ただダストと一緒に居たかったのです。

ダストの手を取り、祈るように返事を待ちました。

「いけません、あなたは美しい姫君と幸せになるべきです」

手を振り払われ、ダストはいつもキラーが出入りする窓を開けました。

キラーとダストを繋ぐ窓です。

「私はあなたなしで幸せにはなれません。私はあなたを愛しているのです」

キラーの愛の告白にダストの鼓動は高鳴りました。

キラーの獣の耳にははつきりとそれが分かっていたのです。

ダストも自分と同じように恋をしているのだと。

「そのようなことを言わないで下さい！！・・・あなたはもうここには来ないで下さい」

ダストの目には涙が溜まり、激しい眼差しでキラーを見つめました。

「なぜですか！？あなたは愛されることを知るべきだ！！」

キラーの訴えは自身に対するものでもありませんでした。

親にも愛されず、他の誰からも愛されなかった二人は似ていたのです。

だからこそキラーにはダストの臆病さが分かるのです。

「外の世界をもっと知って、そして私を愛してほしい・・・」

初めて人を愛し、愛される喜びをダストと分かち合いたいと思い

ました。

それでもダストは頑なに続けたのです。

「あなたはここを出て私を忘れるのです。美しい姫君と幸せになつて下さい。あなたの幸せが私の幸せです・・・だから、さようなら」
溢れんばかりの涙を湛えたダストは窓の傍に立ち、別れを告げました。

「私は必ずあなたをこの塔の中から連れ出してみせます」
ダストの前に立ち誓いました。

キラーには連れ出すための計画が頭に浮かんでいきました。
そして塔から出たらもう一度告白しようと決めました。

「決して忘れはしない」

そう言い残してキラーは塔から跳び出しました。

キラーは早速計画を実行に移しました。

父王と面会し、王位を継ぐにはどうしたらいいか聞きました。
すると、王様は高らかに笑って言いました。

「お前の呪いがなくなればいつでも王位をくれてやろう」

王様はキラーの耳を指してからかうように言ったのです。
獣の耳は呪いをかけた魔女にしか解くことは出来ません。
けれどその魔女は行方知れずなのです。

「解りました。そのお言葉、決してお忘れなきよう」

キラーの計画とは、王位を手に入れ、ダストの国を手に入れることでした。

そしてそのままキラーは魔女を探す長い長い旅に出ました。

長い旅の間、魔女がいるという国という国に行き、情報を集めま

した。

古い情報だったり騙されもしましたが、キラーは呪いをかけた魔女に出会うことが出来ました。

魔女を目の前にしてキラーは言いました。

「私の獣の耳を人間の耳に戻してもらおう」

「イヤだね。私は王家を憎んでいるんだ！」

魔女は叫ぶように言いました。

「何をそんなに憎む？」

「お前の父はかつて、私の姉と愛し合っていた」

魔女は思い出すように話し始めました。

「けれど、王はお前の母と結婚した。姉は捨てられたんだ・・・だから私はお前に呪いをかけてやった」

「その話・・・間違っている」

キラーは王様からその話を聞かされていました。

王様の話をキラーは魔女に話しました。

「父はたった一人と決めた人に求婚したが、身分が違っていると断られてしまった。そしてそのままその人の行方がわからなくなってしまったんだ。父は悲しみ、嘆いたが、政略結婚によって私の母と結婚したそうだ」

青ざめた顔でキラーを見つめました。

「・・・あなたの言う人が父のたった一人の人だったんだろう。今でも父はその人の肖像画を部屋に飾っているよ？母のことも愛していたが、一番に思っていたのはその人だと私は知っている。行方を探し続けているのも」

「う、嘘だッ・・・嘘・・・だろ？」

魔女は両手で耳を覆い、キラーの言葉を否定し続けました。

「嘘ではない。これが事実だ。なんなら父に聞くがいい」

当事者である王様に聞けばもっとはつきりするだろうとキラーは言いました。

すると突然魔女は大声で笑い始めました。

「はははっ、私は姉の言葉を信じず、勝手に解釈をしていた!!」
突然の笑い声に驚きつつキラーはそのまま聞いていました。

「そうだ!! 姉からも同じ話を聞いていた。ただ姉が王をかばったのだろうと勝手に思っていた!! 姉を信じなかったのは・・・愚かだったのは・・・私だったのか――」

途中から泣き崩れた魔女はその場に蹲ってしまいました。

キラーはどうすることも出来ず、ただ立ち尽くしていました。

「・・・お前の呪いを解くよ。そして王にも謝りに行こう。自分の犯した罪を償う」

魔女はそう言ってキラーの身体に杖を向けました。

呪文を唱えるとキラーの身体は光り、そしてそれが収まると獣の耳はなくなっていました。

「こんなにもあっさりと呪いが解けるなんて・・・」

「私は一流の魔女だ。私以上の魔女は早々いないぐらいにな」

そして二人は光りに包まれ、その場から消えてなくなりました。

王様のいる城に向かうために。

魔女と共に帰ったキラーはすぐに王様に面会しました。

「王様、私の呪いは解けました。約束どおり王位をいただきたい」

キラーは決して取ることもなかった帽子を取り、人間の耳を見せながら言いました。

「ああ、もちろんだ。前には礼を言いたいくらいだ。彼女の妹君を連れてきてくれたのだから」

王様は快くキラーに王位を渡しました。

そしてキラーは友好条約を結ぶダストの国に戦争を仕掛けました。
キラーは軍を率いて前線に立ち、見事勝利を収めたのです。

それから間もなく、キラーはダストに会いにあの塔に行きました。二人を繋げたあの窓から、初めて会った日のように。

カタカタと窓を鳴らし、自分がいることを知らせました。

すぐに窓は開き、そこには美しい姿になったダストがいました。

「やっと会えた・・・あなたと別れてから私は王位を手にし、あなたの国を私のものにしました。さあ、あなたは自由だ」

ダストの手を取るとそこに口付けました。

塔の中から連れ出して、もう一度告白をするという誓いを今果たしました。

「あなたを愛しています」

しかしダストは涙を流してキラーの思いに反することを告げました。

「私の寿命はあと僅かしかありません。美しい顔の代わりに命を削ってしまったのです」

ダストの言葉にキラーは呆然としてしまいました。

「そんな・・・やっとあなたをここから連れ出せると思ったのに・・・昔のままでいい、ただただあなたと生きていたかった」

キラーはダストを力の限り抱き締めました。

この腕に愛する人がいると思うとキラーは幸せでした。

ダストの鼓動がだんだんと小さくなっていくのがキラーには解りました。

そして――――小さな鼓動は止まってしまいました。

涙を流しながらキラーは止まってしまった姫に口付けました。

そこへ光りの渦が巻き起こり、何かが現れました。

姿を現したのは呪いをかけた魔女でした。

「愛する人をなくしたのか？」

「ああ・・・私のたった一人の人だった・・・」

強く姫を抱き締め、見慣れない美しい顔を見つめました。
魔女もその姫を見つめました。

「その姫には魔法がかかっている。それを解けば」

「生き返るのか!？」

魔女に向かってキラーは期待に満ちた声を上げました。

「その魔法だけでは無理だ」

しかし魔女は首を振って姫に触れました。

「何でもする!!! 彼女が助かるのならば!!!」

キラーは姫を抱き締めたまま叫び、涙を流しました。

「・・・お前に獣の耳が戻ったとしても?」

「かまわない!!!」

キラーは即答して、魔女に縋りました。

魔女はキラーに笑いかけ、杖をかざしました。

呪文を紡ぐと光りに包まれていきました。

次にキラーが目覚めた時、腕の中で鼓動を奏でているダストに涙が溢れていました。

「ああ・・・愛しいダスト・・・目を開けて。お願いだ」

愛の告白と共に口付けました。

王子様の口付けでお姫様は目を覚ます。

そしてお姫様は言うのです。

とびきりの笑顔で、目には涙を溜めて。

やっと伝えることの出来た、お姫様の本当の気持ちでした。

「あなたを、愛しています・・・」

(後書き)

前作、「塔の中で」という作品を載せていただきましたが、そちらとリンクして出来ています(〓^ω^〓)

こちらの方で完結、という感じなのでこちらを先に読んだ方は前作を読むと物足りないとか、ここまでなの?とか思うかもしれません・
・でもでも楽しんでいただけたら幸いですw(〓^<A>^〓)
ノシ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2534b/>

塔の外へ

2010年10月8日15時51分発行